

北條民雄随想

阿南市文化協会

会長 小笠原憲四郎さん

第3回の民雄忌、北條民雄を偲ぶ会が令和3年12月5日、阿南市文化会館と徳島新聞社の主催で「夢ホール」で開催され、130人を超える方々が来館された。今回の民雄忌は、徳島文学協会代表の佐々木義登氏（四国大学教授）から民雄の略歴や作品などが紹介され、基調講演として小説・映画で話題になった「あん」の作家、ドリアン助川氏（明治学院大学教授）が「民雄からの架け橋、絶望の果てに見える光」と題して、民雄の「いのちの初夜」や「吹雪の産声」をはじめとする作品の内容について約1時間のお話を頂いた。

第2部は佐々木氏が進行役で助川氏、最近「新版 吹雪と細雨 北條民雄・いのちの旅」を出版された清原 工氏、城北高校の演劇部顧問で脚本家の大窪俊之氏、そして私の4人で「小説家 北條民雄の軌跡」

と題してパネル討論を行った。

民雄はハンセン病と闘いながら文学活動に取り組み、昭和11年、22歳の時に文学界賞を受賞し、23歳で逝去した阿南市出身の作家である。

民雄は大正3年（1914）朝鮮ソウル生まれで、1歳にして母が病死し、母方の故郷である阿南市下大野町の祖父母のもとで15歳までの幼年・少年期を過ごし、その後故郷を離れ上京した。17歳の時に、文学への啓蒙を受けたであろう兄（富岡中学・現在の富岡西高校卒業）の死に接し帰郷している。18歳で遠縁の女性と結婚するが、翌年19歳で徳島にてハンセン病を告知され破婚する。

20歳で東京の全生病院に入院、死の恐怖に苛まれながら、文学活動に打ち込み川端康成に師事し「いのちの初夜」で文学界賞を受賞した。

ハンセン病の予防法は民雄17歳の年、昭和6年に設けられ、罹患者の隔離政策が推進された。その治療薬が効果をみせたのは昭和55年以降になってからで、この隔離が解除されたのは平成8年（1996）である。令和3年12月現在のコロナ禍日本でも、コロナ感染者172万人死者1万8000人を超えているが、我々を取り巻くウイルス感染と死の恐怖は、昭和初期当時のハンセ



民雄忌で講演するドリアン助川氏

ン病患者と比べると、人生の絶望感には比べようが無いとも思える。民雄の最後の作品「望郷歌」で、らい病の人たちに国語算数を教え、罹患者でもある鶏三先生の野外で遊ぶ生徒の情景に【「らい病になりゃ人生一卷のお終いさ、ちえッ」という彼の眼にさえも光が増して、鶏三はそういう言葉も笑いながら聴いた。発病当時の記憶と、虐げられ辱められた過去とをその小さな顔の中に持っている】との記述に、その絶望感とわずかの希望の光を感じる。

私が文化協会として阿南市での民雄顕彰碑の建立の話題をお話した



「小説家 北條民雄の軌跡」と題したパネル討論

際に、何と会場中から拍手が湧き、来場された皆さまの民雄に対する熱い思いに接することができた。

民雄の作品集は「北條民雄小説随筆書簡集（講談社）」と昨年復刻された「いのちの初夜 北條民雄（角川文庫）」があるが、さらに今度は岩波文庫からの復刻版が出ると伺っている。民雄の作品の再評価がますます高まり、多くの方々に民雄作品に接してほしいと思っている。